

はじまりを歩く

出版

(京都市、東京都)

職人の腕刻む 真っ黒な板木

NHK大河ドラマ「光る君へ」で注目される日本最古の長編小説「源氏物語」(紫式部)や初のエッセー「枕草子」(清少納言)……。平安時代から現代まで千年以上のロングセラ―は、どのように読み継がれたのだろうか。日本で商業出版がはじまったのは京都。現存する最古の出版社の一つを訪ねた。

今から約400年前に創業したという仏書の出版社「丁子屋」。その流れをくむ「法蔵館」は、京都市下京区の東本願寺近くにあり、書店を併設する出版社屋の南側には江戸時代の1850年(ころから残る大小三つの蔵がある。真ん中の「板木蔵」の木戸を開けると、中は薄暗かった。天井から下がる裸電球をつけると、棚にぎっしり詰まった真っ黒な板木、約1万枚が暗闇から浮かび上がった。

職人の手で文字や絵が彫られた板木で一枚一枚印刷し、本を作ったという。黒く光る板木を触ると手に墨がつく。まるで江戸時代にタイムスリップしたような気分になった。

案内してくれた法蔵館の西村明高社長(88)によると、江戸時代から残る板木蔵は唯一無二のものという。

板木は平安時代からあったが、京都の大本願が仏教の経典類を刷るのが主だった。

「源氏物語」「枕草子」などの文学は印刷されたことなく、公家や寺社が写本して所蔵。貴族や大名など特権階級はそれを借りて写本し、読んだという。その後、豊臣秀吉の朝鮮出兵やキリスト教宣教師の来日で印刷の技術が発展する。

慶長4(1599)年、徳川家康が教育のために寄付した木

活字を使用し、京都・伏見にあった円光寺(現在京区)が「孔子家語」などの書物を印刷。その後、木版印刷が発展し、読書熱は特権階級だけでなく、商人、町人にも広がっていく。

本を出版し、店頭で販売もする「書林」と呼ばれた版元が生まれたのは、安土桃山時代末期から江戸時代初期にあたる激動の時代、慶長年間(1596〜1615年)だ。

法蔵館のルーツとなる丁子屋はその一つで、京都の五条橋通(現下京区)で書林を開業した。徳川家康はすでに江戸幕府を開いていたが、まだまだ文化の中心は上方だった。

「こちらは浄土宗やその他の仏書や、絵を入れたりして庶民向けにわかりやすく要約した書物を作っていた」と法蔵館の戸城三千代・編集長(88)。

このころ、京都で出版されたのは仏書、儒書、医学、史書など堅い書物が中心だった。

当時の版元は本を企画、執筆を作家に依頼し、草稿、押絵を完成させると、木版を彫る絵師が下絵をつくり、刷った紙を製本、問屋として他へ卸したり、店先で売ったりしたという。

木に残る彫りや墨を見れば、職人の腕がわかったという。

「出版はかなりのコストがかかるので出資を募って自費出版したり、所有する板木(出版権)を本屋仲間と売買し、経費を削減したりするケースも多々みられた」(戸城編集長)。

板木は山桜が使われ、売れなかった本の板は削られ、他の本へリサイクルされたという。

京から江戸へ 葛重の企画力

上方では1682年に井原西鶴の「好色一代男」、1703年に近松門左衛門の浄瑠璃本「曽根崎心中」なども大ヒットした。ちなみに法蔵館に残る板木のロングセラーは「極楽道中独案内」(88年刊)。今でも「100年死案内」だ。

江戸時代の書林の面影を今も残しているのは、法蔵館から4キロほど離れた寺町通りの本能寺門前にある竹書堂だ。創業は江戸中期1751年。創業者は、給御門の妾(1864年)で被災した直後に再建された今の店舗は京都最古で、「はったり床机」(折り畳み式の縁台)の上には本が平積みされた当時のスタイルのまま。

店内には江戸期に出版された竹取物語、徒然草、紫式部日記などがズラリと並び、シーボルトもかつて北斎漫画の初版を購入したという。

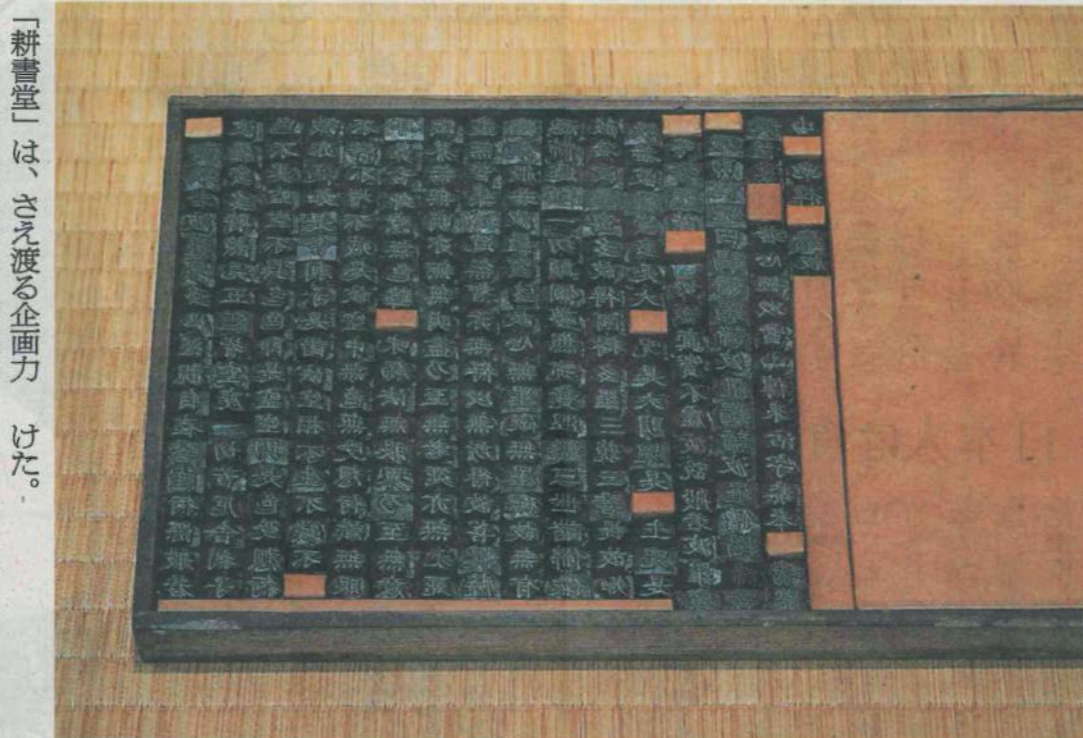
7代目店主の佐々木惣四郎さん(88)は、「江戸期は出版も手がけていたが、次第にもうからなくなり、明治期は書店だけになった」と振り返る。

江戸中期まで京都が出版界をリードしてきたが、やがて百万人都市へ成長した江戸へ軸足が移り、ある男の出現で急成長を遂げる。

江戸でヒットした出版物を次々と世に出した葛重三郎(以下は葛重)――。2025年NHK大河ドラマ「へらぼう」の主人公だ。

葛重研究の第一人者の中央大学の鈴木俊幸教授(67)によると、もともと江戸の書店の多くは京都の書店だった。

堅い書物が京都書店が扱う一方、元禄期(1688〜1704年)には、唐や往來物(学習書)などの実用書、絵入浄瑠璃本(絵入りの小説本の祖)や浮世絵などの娯楽のための書物類が江戸の業者から新たに出版されるようになった。これらは「地本」と呼ばれるようになり、そのマーケットが拡大していった。



円光寺版木活字。徳川家康が1599年に寄贈した日本で最古の木活字
=京都市左京区一乗寺小谷町

1773年(ころ、葛重は33歳で生まれ育った吉原で本の小売りを始めた。

葛重が茶屋や遊女屋と組んで当時、刊行したのは吉原のタウソノカイド「吉原細見」、遊女の評判を記した「二百十本」。「吉原細見や稽古本、そして黄表紙などの戯作類、これらが著実に葛原の経営を支えていた。天明8(1818)年には日本橋通油町に進出、江戸市中の出版界の新たな一角を担うようになった」と鈴木教授。

一耕書堂は、さえ渡る企画力で流行の狂歌・戯作類の出版を先導するようになり、狂歌界の大立者の大田南畝、人気作家の明誠筆名三や恋川春町や山東京伝作品をほとんど一手に手掛けた。その一方で喜多川歌麿の浮世絵も出版しはじめ、江戸屈指の地本版元に成長した。

だが、寛政改革の折、奉行所が山東京伝作酒落本が風俗を乱したとして摘発され、葛重は財産の半分を没収される処分を受けた。

この一件で、高まった狂歌や戯作の出版熱は一転、自業ムードに包まれたが、葛重は屈せず、3年後に東洲斎写楽という謎の絵師が描いた役者絵を売り出した。しかし、寛政9(1799)年に47歳の若さで病死。実字がない葛重の跡を番頭が継ぎ、耕書堂は4代まで続くが、幕末に消滅したという。

「武士階級の需要に依存していた書物問屋の半数は、武士た

現存する最古の出版社の一つ、「法蔵館」の蔵を案内する西村明高社長(京都市下京区正面通馬車東)



ちがいなくなった維新後に店を畳んでいくが、その一方、新時代のニュースを伝えるメディアとして浮世絵の産業は生き残っていた。学制発布後は教科書景気が後押しして書籍業界は勢いを再加速させ、地方書店の参入も著しくなる」(鈴木教授)

明治期は金澤堂、博文館、春陽堂が台頭。さらに新潮社、中央公論社、講談社、文芸春秋、岩波書店などが誕生した。

冒頭の法蔵館は江戸時代から今も続くが、その秘訣を西村社長が語る。「維新後、都は東京へ移ったが、各宗派の寺院を統括する本山がずっと京都にあったことが大きい。仏書一筋のニッチな商いで生き延びた」(文・藤平書枝 写真・楠本悠)

余話

葛重三郎が当時出版した書物の「掘り出し物」がある。と聞かされて、世界屈指の本の街として知られる東京・神田神保町を訪ねた。

140年以上の歴史を誇る老舗「大屋書房」は駿河台下交差点近くにあった。江戸時代の和や浮世絵、古地図や妖怪のコレクションで知られ、海外からも多くの研究者らが訪れるという。店内に入ると、古紙の匂いがし、江戸時代の酒落本、黄表紙、絵本などの古書、浮世絵が所狭しと積み上がり、江戸の本屋に迷い込んだようだ。

4代目店主の藤原くみさん(88)は「葛重が出版した本を見せると、葛重が出版した本を見せると、次から次へと箱に入った古書が目まぐるしく出てくる。これは、葛重が出版した本ではないか」と聞かされた。「触ってもいいですよ」と藤原さん。

江戸屈指の歓楽街「吉原」で生まれ育った葛重が出版界での上がっていきつかけになったカイドブック「吉原細見」もあった。書物には「安永5年申 正月 大政 新吉原大門口 板元 葛重三郎」と記されていた。

当時、吉原細見は他の版元も出したが、葛重版は見やすく工夫しており、人気を呼んだという。



吉原で成功した後、日本橋通油町に進出した「耕書堂」で出版した書物もあった。

葛重の狂歌師名「葛原丸」で自作と銘打った。作目の黄表紙「身体開帳縁起」

巻末に葛重本人が年始のあいさつを行う場面の絵が載っていた。写真。葛重の出版セリが光る作品として、喜多川歌麿の浮世絵「当時(寛政)三美人」を明治大学の日置貴之准教授はあげる。

吉原の茶屋だけでなく、水茶屋やせんべい屋の看板娘の姿を描いたものだが、「今に置き換えるならば、若者は地下アイドル、看板娘はSNSのインフルエンサー」的な存在。雑誌のグラビア感覚で生み出されたのではないかと日置さん。

幕府は風紀取り締まりなどを強化するが、葛重は屈せず、写楽の名作を残した。

店主の藤原さんは「葛重が大河ドラマの主役になると聞き、めっちゃうれしかった。江戸の出版界は世界に誇れる日本文化を多くを残した。日本人もぜひ、興味を持ってほしい」と語った。

1773年(ころ、葛重は33歳で生まれ育った吉原で本の小売りを始めた。

葛重が茶屋や遊女屋と組んで当時、刊行したのは吉原のタウソノカイド「吉原細見」、遊女の評判を記した「二百十本」。「吉原細見や稽古本、そして黄表紙などの戯作類、これらが著実に葛原の経営を支えていた。天明8(1818)年には日本橋通油町に進出、江戸市中の出版界の新たな一角を担うようになった」と鈴木教授。

一耕書堂は、さえ渡る企画力で流行の狂歌・戯作類の出版を先導するようになり、狂歌界の大立者の大田南畝、人気作家の明誠筆名三や恋川春町や山東京伝作品をほとんど一手に手掛けた。その一方で喜多川歌麿の浮世絵も出版しはじめ、江戸屈指の地本版元に成長した。

だが、寛政改革の折、奉行所が山東京伝作酒落本が風俗を乱したとして摘発され、葛重は財産の半分を没収される処分を受けた。

この一件で、高まった狂歌や戯作の出版熱は一転、自業ムードに包まれたが、葛重は屈せず、3年後に東洲斎写楽という謎の絵師が描いた役者絵を売り出した。しかし、寛政9(1799)年に47歳の若さで病死。実字がない葛重の跡を番頭が継ぎ、耕書堂は4代まで続くが、幕末に消滅したという。

「武士階級の需要に依存していた書物問屋の半数は、武士た

◆次回は「団地」について取り上げます。

法蔵館文庫「藤原道長」(山中裕考)を描選で3人にプレゼント。住所・氏名・年齢・30日をはがきに記入し、〒119-0378 晴海郵便局留め、朝日新聞be「はじまり30日」係へ。4月4日の消印まで有効。